

《西番譯語》〈川七〉18世紀チベット語打箭爐方言の性格について

鈴木博之

1 はじめに

《西番譯語》は明清代に作成された漢語と周辺域の諸民族の言語を対照した語彙集及び文例からなる《華夷譯語》の1つである。《華夷譯語》はその成立年代によって甲・乙・丙・丁の4種に分類され、18世紀清朝の會同四譯館の成立（1748年）以後に作成されたものは丁種本に分類される。丁種本《西番譯語》には少なくとも9種類が存在し、西田・孫(1990:9-42)においてそれぞれの概要がつかめる。9種には馮蒸(1981)の分類による番号が与えられ、本稿で扱う打箭爐のチベット語を記録しているものは〈川七〉とされている。本稿では、《西番譯語》〈川七〉のことを《打箭爐譯語》と呼ぶ。

丁種本《西番譯語》の内容は計740語からなる漢語と各種民族言語との対訳語彙である。各項目は3段構成で、1段目から順に、チベット文字による表記、漢語語彙項目（実質上の見出し語）、民族言語の漢字音写形式から成る。《華夷譯語》は周辺民族から送られてくる来文の翻訳や使節との通事のための教本として作成された経緯があるが、丁種本《西番譯語》は事情が違い、現在の中国西南地区に居住している少数民族の言語について今で言うアンケート調査によって作成された¹。そのため、丁種本《西番譯語》の研究では、それらに記録される言語群の当時の分布が近年さまざまな分野で注目される四川省西部「川西民族走廊」であることもあって、いかなる言語の記録であるかが最も興味のある問題となった²。丁種本《西番譯語》の全体に触れる西田・孫(1990:9-42)の研究によって、それぞれがどの言語を記録し

¹その事情は西田(1973:8-12, 18)にまとめられており、1748年に乾隆帝の勅諭によってこの種のアンケート調査が行われ、それに必要な臨地調査については、北京から派遣された調査員が行ったのではなく各所轄の機関にアンケート用紙すなわち740語の語彙調査票を配布して現地の担当者が記入したとされる。

ただし1748年以降、會同四譯館において編纂されたものも存在し、烏雲高娃(2004)が扱う“西洋館”雑字などがある。その中には2000語を越す語彙が記録されるものが5種ある。さらにこれと似た体裁をとる文献に《西番館譯語》がある。筆者の調査の結果、これは西田・孫(1990:297)にある西番語Dに対応するものであると分かった。

²先行研究では《西番譯語》9種のうち、〈川四〉のペマ語（西田・孫1990）と〈川八〉のドス語（西田1973）が詳細に研究されている。

ているかということについては、大勢が判明したことになる。それを追認する記述が西田 (2002:254) にある。

ところが、チベット語方言を記録していると考えられるものについては、それがチベット語であると認定されるにとどまり、いかなる方言が記録されたかという段階までの議論は十分尽くされてはいない。この背景には、西田・孫 (1990) の研究当時には現代チベット語方言の資料が少なく、分析する手段を欠いていた点が挙げられる。チベット語は方言差異が激しいことで知られるが、特に丁種本《西番譯語》が記録した川西民族走廊地域の方言については極めて複雑な分布状況を示しており、以前は大まかな輪郭のみが知られる程度であったが、近年の研究によってそれぞれの方言の特徴や詳細な分布が具体的に判明してきた (鈴木 2006b, 2007a)。このような現代チベット語方言の研究の進展によって、丁種本《西番譯語》の記録する言語に対する研究の視点が変化し、一般には伝えられることの少ない、過去のチベット語方言の口語資料としての価値を具体的に検討できる段階に至ったといえる³。

本稿では、《打箭爐譯語》を含む丁種本《西番譯語》の北京・故宮博物院図書館 (壽安宮) 所蔵本⁴、すなわち故宮本の閲覧が可能になったことを受け、筆者が 2007 年 12 月に同本を閲覧したことから、故宮本を基として《打箭爐譯語》に記録されるチベット語方言の性質を明らかにすることを試みる⁵。

2 《打箭爐譯語》の議論にあたって

本稿の議論は、基本的に鈴木 (2007b,c,f) における議論と同じく、記録された方言の特徴を明らかにするという方向性をもつ。しかし《打箭爐譯語》に記録されたチベット語方言の研究は、先の研究とはまったく異なる点がある。それは《打箭爐譯

³ 実際、近年に行われた現代のチベット語方言資料と対照させた研究として《西番譯語》〈川六〉 (=《木坪譯語》) の鈴木 (2007b,c) や《西番譯語》〈川九〉 (=《木里譯語》) の鈴木 (2007f) があるが、いずれも西田・孫 (1990:9-42) において推定される形式の誤りを修正し、かつ《西番譯語》が記録する 18 世紀の口語形式が現代の方言につながる点を明らかにしている。《打箭爐譯語》についても、鈴木 (2007a:389-396) が概略的に取り扱っている。非チベット語を記録するものについても同様に、ペマ語を記録する《西番譯語》〈川四〉 (=《白馬譯語》) を扱う孫宏開等 (2007) や、リュズ語を記録する《西番譯語》〈川五〉 (=《呂汝譯語》) を扱う池田 (2007ab) も、現代語とのつながりを考えつつ議論が展開されている。

⁴ ただし同館は本稿が《西番譯語》と呼ぶものを《川番譯語》という名称で管理している。

⁵ 複数の先行研究ではすでに出版されている西田・孫 (1990) の付録の影印本「北京大学図書館本」が用いられているが、本来これは故宮本を原本としており、また書写に誤りも多いとされる (西田・孫 1990:373) ため、故宮本の参照が望まれていた。

また、西田・孫 (1990:33) の指摘にもあるように、同書の著者が当時扱いえた北京図書館蔵藍色本では、〈川七〉と〈川九〉が上下冊で入れ違っているとじられており、本来の《打箭爐譯語》は〈川七〉の上冊と〈川九〉の下冊から成る。これは故宮本でも同じで、〈川七〉と〈川九〉が上下冊で入れ違っている。

なお、故宮本は実地調査に用いられた漢語項目が印刷されたアンケート用紙そのもの (西田 (1973) の付録の影印本「今西春秋旧蔵本」がこれに該当する) ではなく、全項目が手書きの写本である。

語》に記される通用地域を示したと考えられる序文⁶に示される地域が広大で、現在の状況から考えると分布するチベット語方言が多様でありそれぞれの差異が激しく、この情報が直接特定のチベット語方言を示していることにはならない点である⁷。このことから、序文の内容を検討して、現代のチベット語方言のうちどの方言につながりうるかを仮定するという手順が必要となる。

まず、序文には土司の名「堅參徳昌」が含まれており、この人物は確かに18世紀の人であることが判明している（龔蔭 1992:266）ため、《打箭爐譯語》の成立年代を18世紀中葉とみることは問題がない⁸。次に序文の地名から《打箭爐譯語》に記録された言語の通用地域を考えると、「綽斯甲」が現代の四川省阿壩藏族自治州南西部に当たる以外はほぼ同省甘孜藏族自治州一帯を指し、非常に広範囲で用いられていたことになる。現代の言語事情を考えれば、以上の地域には複数の言語が話され、チベット語の方言も多種多様なものが用いられている⁹。《打箭爐譯語》が200年以上前に記録されたものであることを考慮したとしても、この地域で1つの共通語が通じていたということは想定しがたい。ここで序文の末尾にある「俱與明正司相同」に注目すると、各種方言が明正土司の言語と比べられていることから、土司の言語すなわち打箭爐（ダルツェンド、現代漢語名・康定）で通用していた方言と見当をつけることは不可能ではない。この点からまず《打箭爐譯語》に記録された言語は、現代の分布も参照し、カムチベット語ムニャ方言群に属する方言¹⁰もしくはそれに近い方言を記録しているのではないかと仮定する¹¹。

⁶内容は以下のとおり。ただし地名の羅列箇所を「」でくくり、地名ごとに区切って示す。

四川泰寧協建昌道協標阜和營打箭爐同知

各所轄明正長河西魚通寧遠軍民宣慰使堅參徳昌所管轄之「革什咱、綽斯甲、巴底、巴旺、喇滾、咱裡、木噶、瓦七、俄洛、白桑、惡熱、上下八義、少烏石、作蘇策、八哩籠、上中渡、他咳、索窩籠、惡拉、上中下渣壩、叭桑、木轆、格窪卡、甲那工弄、吉增卡桑阿籠、沙卡、拉里、八烏籠、姆朱、普供碟、魯密東谷一十六百戸、裡塘、巴塘、瓦述十土司、霍耳九土司、束署、孔撒、科則、更平、東撒、徳爾格、上下革責、雜谷嗎竹卡、籠壩、春科、蒙噶結、瞻對、瓦述、谷納、林葱、上納奪、上下臨卡、尚里郭宗、雲多、儀蓋、桑隆石、上下蘇阿、上瞻對、下瞻對」字語俱與明正司相同照依奉頒字書門類次序譯繕如左

地名同定の詳細は本稿では割愛するが、楊嘉銘等 (1994:31-43) が有用である。なお、鈴木 (2007a:367) が9種の丁種本《西番譯語》の序文が示すおおよその地域を図示している。

⁷同様の状況は《西番譯語》〈川一〉 (=《松潘譯語》) でも当てはまる。《松潘譯語》については太田 (2008) の校本がある。これと対照的なのが《木坪譯語》や《木里譯語》で、序文の示す地域がかなりの程度で限定的であり、現代のチベット語方言事情を考慮する際に十分参考になるものである。

⁸孫宏開等 (2007:140) では丁種本《西番譯語》の成立年代を「約17世紀40年代」としているが、17世紀は明らかに18世紀の誤りである。

⁹川西民族走廊地域に分布するチベット語の方言区分は Suzuki (2009) を参照。

¹⁰ムニャ方言群を構成する方言は現在の康定県を中心とする地域で用いられる。

¹¹このことは、実際には《打箭爐譯語》に記録された語の語形式の分析を通して具体的に示すことが可能であるが、それは後の議論で明らかにする。

次の作業としては、《打箭爐譯語》に記録されたチベット文字形式と漢字音写の与える形式に基づく18世紀チベット語口語音の推定である。この方法は西田(1963)をはじめとし、同氏の一連の《西番譯語》に関する著作において述べられている。簡潔に述べると、まず記録当時の漢字の音価を推定し、それを音写漢字に当てはめチベット文字形式との対応関係を推測し、推定の対象の言語と関係のある現代語から推測される音価で補正し、18世紀チベット語口語形式を推定するというものである。

漢字音写が表す音については、現代の西南官話四川方言につながる方言音であることが鈴木(2007bcf)など他の丁種本《西番譯語》の研究から判明している¹²。《打箭爐譯語》についても同様であることは、そこに記録された形式を分析すれば容易に確認できるため、次節に具体例を挙げて示す。この事実から、現代の西南官話音を便宜的に適用して漢字の音価を考えることに一定の妥当性が与えられる。また、《打箭爐譯語》に記録されたチベット文字形式は、規定されたチベット文語形式とは細かな点で相違があるものの、全体的には漢字音写形式に対応しているといえる¹³。これに加えて現代のムニャ方言群に属する方言を参考にすれば、かなりの精度で《打箭爐譯語》に記録された言語の性格が判明すると考えられる。

3 音写漢字が表す音の性質

ここでは《打箭爐譯語》に記録された漢字音写が現代の西南官話四川方言（以下「四川漢語」と呼ぶ）につながる音体系をもつ口語音に基づいていたことについて、《打箭爐譯語》中の具体例に基づいて示す¹⁴。

なお、四川漢語の音声的特徴は地域によって歴然とした差がある。現代四川漢語の調査報告は楊時逢(1984)がもっとも詳しいが、同書の扱う四川省には旧西康省地域¹⁵が含まれておらず、その地域の記録が存在しない。ほかにも四川大学方言調査工作組(1960)も詳しいが、先述の状況と大して変わらない。それゆえ、現代の康定近辺の漢語がどのようなものかは先行研究になく、方言音をこれらの中から知るの

¹²なお、《松潘譯語》についても太田(2008:112)に西南官話の特徴が反映されている旨の指摘がある。

¹³これと対比的な事例に、たとえば《呂汝譯語》のチベット文字形式はチベット文語形式に近く、記録されたリュズ語の音価を示していないといったことがある。池田(2007a)参照。

¹⁴以下、具体例を挙げる際には、それぞれの項目の漢字音写形式には四川漢語の読音を添え、チベット文字形式はWylie方式でローマ字転写するが、アヌスヴァーラ（チベット文字形式の上部に置かれる点）はmで、tの反転字はṭで転写し、いくつかの略字はそれが表す元の形式のWylie方式による転写を与える。語義には日本語訳を付し、見出しとなる漢語形式は添えない。ただし適切な訳語が見当たらない場合には、見出しとなる漢語形式を掲げ、「漢語形式*」の形で示す。

¹⁵西康省は1939年から1955年までの間、現在の四川省雅安市、甘孜州、涼山州などを含む地域に存在した行政地域である。詳細は任乃強・任新建(2002:44-47)参照。

は困難であるが、地域的観点を考慮するならば、楊時逢(1984:709-724)の懋功方言の音体系が最も参考になるだろう¹⁶。本稿では、筆者自身の現地調査の際に記録した丹巴県の漢語音(単字音)を主に用いて、以下議論を進めていく¹⁷。

以上のことから、各地域で細かな差異があり変調も起こる声調に関しては、依拠する漢語方言が確定されないため、議論の対象からはずす。これについては別の機会に議論する。

3.1 チベット文字形式による漢字音写の検討

《打箭爐譯語》において、チベット文字形式の多くは文語形式と一致するが、一部に口語音を反映したような表記が見受けられる。

さて、《打箭爐譯語》には、漢語の項目と漢字音写が同一になる語が19個存在する。注目すべきは、これらの例に与えられるチベット文字形式がチベット文語形式ではなく、音写漢字の音を反映したチベット文字による音写形式と分析できる点である。この中から漢語音の特徴を反映している例を挙げる¹⁸。

¹⁶懋功方言は現在の小金県(康定県の北東に位置する)に相当する地域の方言である。参考までに音体系を整理すると、以下のとおり。表記は適宜改めている。

【声母(初頭子音)】

閉鎖音	有気	p ^h	t ^h		k ^h
	無気	p	t		k
破擦音	有気		ts ^h	tɕ ^h	tɕ ^h
	無気		ts	tɕ	tɕ
摩擦音	無声	f	s	ʃ	ç
	有声			ʒ	
鼻音	有声	m	n		ŋ

【韻母(わたり音+母音+音節末音)】

ĩ	ə	a	o	e	ai	əi	au	əu	an	ən	aŋ	oŋ
i		ia		ie	iai		iau	iəu	ian	in	iaŋ	ioŋ
u		ua		ue	uai	uəi			uan	uən	uaŋ	
yi			yo	ye					yan	yin		

【声調】

陰平：55、陽平：31、上声：53、去声：13

¹⁷丹巴県は小金県に西接する地域で、通用する漢語は懋功方言に近いものと想定される。なお、筆者による字音の調査は体系的に行っているわけではなく、丁種本《西番譯語》に記録された漢字を対象にその読音を記録するという方法で行った。その音形式の表記方法は、楊時逢(1984:709-724)の懋功方言の例を参考にする。これはあくまでも表記法の問題である。

また、厳密に言えば、地域差や時代差も考慮される必要があり、1つの体系の中で考えることが適切であるとはいえない。ただし、四川大学方言調査工作組(1960)の方言音の対照を見ると、旧西康省に隣接する方言に極めて大きな差異が見出されるわけではない。

¹⁸以下、例を挙げる際に《打箭爐譯語》のチベット文字形式を表す項目には「蔵文」と示す。なお、チベット文字の表す概略的音価については、格桑居冕・格桑央京(2002:271-284)

川七/漢字音写	川七/蔵文	語義
速香 su ɕiaŋ	bsu shaṃ	速香*
人參 zən sən	zhing sing	朝鮮人參
蓆砂 su ʂa	bsu shag	縮砂

これらのうちで注目されるのは第2例の漢字音写第2字「参」である。これに対応するチベット文字形式が *sing* となっていて、漢字の音価が *sən* であることを示しているといえる。これがもし西田・孫(1990)のいうように北京音であれば、字音は *ʂən* であるため、対応するチベット文字形式には第3例のように *sh* が選択された可能性が高い。

また、チベット文字形式に注目すると、*sh* は漢字音写の *ɕ* (第1例第2字「香」) と *ʂ* (第3例第2字「砂」) に対応しているため、この文字の示しうる音価は《打箭爐譯語》全体を通して考察する必要があるといえる。

次の例は破擦音をめぐる問題である。

川七/漢字音写	川七/蔵文	語義
菖蒲 ts ^h aŋ p ^h u	tshang phug	菖蒲
川芎 tɕ ^h uan ɕioŋ	chun shom	川芎

これらのうちで注目するのは第1例の漢字音写第1字「菖」である。これに対応するチベット文字形式が *tshang* となっていて、漢字の音価が *ts^haŋ* であることを示しているといえる。この「菖」の字は、北京音であっても四川漢語においても、*tɕ^haŋ* となる。もし実際の音価がそうであれば、対応するチベット文字形式には第2例のように *ch* が選択された可能性が高い。記録された漢語音では、現代の成都方言のようにそり舌音初頭子音が歯茎破擦音に合流する現象が音声レベルですでに生じていたと考えることができる。

次の例は、よく知られている *n* と *l* の合流をめぐる問題である。

川七/漢字音写	川七/蔵文	語義
樟腦 tɕaŋ nau	lcam lab	樟腦
綾 nin	ling	綾絹

四川漢語では、多くの方言が *n* と *l* を弁別しない¹⁹。しかしチベット語では、どの方言でも *n* と *l* は基本的に弁別されるため、両者が混乱することは考えにくい。注目などを参照。

¹⁹音体系上では *n* で表されることが多い。このように書かれる明確な根拠は不明だが、後で述べるように、この音が他の鼻音と音声実現上共通した点を持つことに由来する可能性がある。

するのは第1例第2字「腦」で、これは四川漢語音も北京音も基本的には *nau* と考えられるが、当該のチベット文字形式は *lab* のように *l* を含んでいることである。これは漢語音の実際の音価が [l] と [n] の間でゆれがあった証拠の1つと考えられ、確かに *n* と *l* を弁別しない方言音の体系に基づいているといえる。

3.2 現代チベット語方言の音体系から見る漢字音写の方法

西田(1963:101, 1970:4-5)などの先行研究も述べるように、分析対象である言語の直接の後裔かそれに系統的に極めて近い言語における音体系に通例見られる対立は、たとえ漢字音写にその対立が反映されていなくとも、口語形式の推定の際に対立を認める必要がある。この原則を《打箭爐譯語》について考えると、現代のカムチベット語、特にムニャ方言群の音体系、およびそれらの方言の音変化史から推定される対立は復元されなければならない。この中に、当該文献の漢字音写形式が四川漢語に基づいていると考えられる例が含まれている。

これ以降の議論では、《打箭爐譯語》の語彙項目に加えて現代チベット語の情報も可能な限り示す²⁰。ムニャ方言群のうち主に語彙資料の公開されている Rangakha (新都橋) 方言の形式(鈴木 2007d)を各項目に添える。ただし同方言の形式が議論を支持しない場合、同じムニャ方言群に属する Phungposhis (朋布西) 方言、Dartsendo (康定) 方言、Lhagang (塔公) 方言の3種の形式も参照する。この3種はそれぞれ (Ph)(Da)(Lh) の略称を具体例の後ろに掲げる。その他の方言に言及する必要がある場合は、初出の箇所注記する²¹。

ここで特に扱う点は、上でも触れた *n/l* の弁別がないことに起因する問題である。基本的に、*n/l* を弁別しない四川漢語では、初頭子音 *n* で表される音写の中にチベット語の *n, l* さらに *r* や *l* も表すものが含まれている²²。

²⁰ ただし《打箭爐譯語》の語彙項目の口語形式がもはや伝えられていないものも少なくない。このため筆者は、提示される語義に異なりが見られても、各音節の語源を等しくする要素を参考として掲げる場合もあるが、18世紀チベット語音の推定を支持できると考える。

現代チベット語例は基本的に対応する語形式を挙げるが、煩雑になる場合は議論の中心となる音節のみを示す。省略箇所は“...”で示し、また声調は付さない場合もある。対応する現代語が不明のものは空白のままである。

²¹ 《打箭爐譯語》の序文を考えると、「打箭爐」の地名に相当する地域、すなわち康定県城鎮で話される Dartsendo 方言を参考にするほうが望ましいと考えられるが、現在 Dartsendo 方言の話者はほとんどいない。この状況に関連する康定県城鎮のチベット族に関する詳しい調査に蘇發祥主編(2006:305-316)がある。ただし Migot (1957) に Dartsendo 方言の記述が含まれるため、適宜参考とする。

²² 以下に示す推定形式は、各箇所議論の対象となる要素について掲げる。“—”は推定される音節を省略していることを意味する。

川七/漢字音写	川七/蔵文	推定形式	語義	現代語例
浪 naŋ	gnam	*n-	空	nā ^h ka:
弄 noŋ	rlung	*l-	風	lō
洛 no	lho	*l-	南	lo
達零 ta nin	da ring	— *r-	今日	'te ri

以上に示した推定形式を得る作業は単純であるが、実はさらに複雑な問題がある。たとえば、西田・孫(1990:34)では「龍」の例の漢字音写「律」が表そうとする音形式を*rüとしている。これはおそらく北京語音 ly からの推定であろう。ところが「律」の字音は四川漢語懋功方言で no であるから、まず母音の推定は適切でない。さて、初頭子音の取り扱いについては、四川漢語で広く見られる自由変異に [n, l, nd, n^h] が存在する²³ため、具体的な音価の決定にはチベット語方言の情報を参考にしなければならない。現代の康定周辺のチベット語の場合、多くが^hqo? や^hqu:のように前鼻音を伴う有声そり舌閉鎖音で実現する。このとき、漢語初頭子音の鼻音系列は歯茎音とそり舌音の弁別を行わないため、チベット語の前鼻音つきそり舌音を n を含む漢字で音写したと推定することに妥当性があるといえる。

以上の作業で得られた対応関係は以下のように提示できる。

川七/漢字音写	川七/蔵文	推定形式	語義	現代語例
律 no	'brug	* ^N dz-	龍	^h qu:

実際《打箭爐譯語》には、類似の漢字音写から前鼻音を推定できる平行例が複数確認される。これらはチベット文字形式からも前鼻音での対応が期待される²⁴。

川七/漢字音写	川七/蔵文	推定形式	語義	現代語例
洛 no	'gro	* ^N dz-	行く	^h qo
達樂 ta no	rta 'gro	— * ^N dz-	馬で行く	... ^h qo
洛明洛 no min no	'dod mi 'dod	* ^N d- — * ^N d-	願う	
捏納 nie na	'jang nag	* ^N dz- *n-	藍	

さらに加えて、チベット語には前鼻音を伴うもののほかに前気音を伴う例がある。その一方で四川漢語初頭子音 n の自由変異音に [^hd] は見られないが、漢語の音体系としてチベット語に見られるような [^hd] と [^hd] は弁別不可能なので、閉鎖音に先行

²³この点は楊時逢(1984)の多くの方言音の説明中にも類似の指摘があり、また四川大学方言調査工作組(1960:5)にも類似の指摘がある。

²⁴チベット語諸方言における前鼻音は文語形式の初頭子音連続のうち最初頭が m または ' であるものに対応している。

する継続音の要素を伴っていたとすれば、以下のような音写もありえたのだろうと考える。このような形式は、チベット語側で前鼻音が現れないということが前提となるが、基本的に以下の例ではチベット文字形式からも保証される。

川七/漢字音写	川七/蔵文	推定形式	語義	現代語例
捏馬 nie ma	brgya ma	* ^H dz- —	斤	^{fi} dza ma (Da)
捏当白 nie tan pe	rgya dang bod	* ^H dz- — —	チベット人と漢人	^{fi} dza ...

以上に見るように、現代チベット語の情報と四川漢語の音体系における音声実現を十分考慮すれば、四川漢語初頭子音 *n* は極めて多くのチベット語の音形式を表していたことが分かる一方で、なぜそのような音写字が選択されたのかにも説明が与えられるのである。

4 18世紀チベット語打箭爐方言の音形式の復元

前節の議論から、《打箭爐譯語》の音写漢字の音体系が現代の四川漢語に直結する成分を有していたと考えるのは妥当であることが判明した。このことから本稿では、同文献の成立事情も考慮して、漢字音写全体が四川漢語に基づくものであると仮定して議論を進める²⁵。

本節では、《打箭爐譯語》の漢字音写、チベット文字つづりおよび現代チベット語諸方言の情報から推定できる当時のチベット語の音声形式を提示する。議論は初頭子音と母音+末子音の2つに分けて行う。議論の視点は単に音体系の復元だけでなく、チベット文字つづりとの対応関係にも置かれる。

4.1 初頭子音

ここでは初頭子音の形式の推定について議論する。

4.1.1 閉鎖音・破擦音

現在の康定近辺に分布するチベット語方言には、閉鎖音・破擦音について無声有気音・無声無気音・有声音の3系列を持つ。さらにカムチベット語全般を見てもまた同様である。このため、漢語の音韻体系が有気音、無気音の2系列であるけれども、18世紀チベット語打箭爐方言における推定形式にはこれら3系列を設定するのが妥当であろう。

²⁵本稿の議論の中心は推定されるチベット語形式であって漢語近世音の特徴ではないため、後者をめぐる議論は本稿ではひとまず避ける。

無声有気音・無声無気音・有声音は、かなりの程度で蔵文のつづり字との対応関係が明白である。一方、概略漢字音写ではチベット語の無声有気音は有気音で、それ以外は無気音が選択されている。音写漢字が無気音の場合、チベット語口語形式が無声無気音か有声音かは、現代チベット語方言との対応関係も考慮して、チベット文字つづりで有声音字 *g, j, d, b, dz* に *m, '* 以外の頭字、前接字が伴う場合を有声音と考える。

まず、調音点、有声性について推定に問題のない例を掲げる。

川七/漢字音写	川七/蔵文	推定形式	語義	現代語例
怕 <i>p^ha</i>	pha	* <i>p^h-</i>	父	ʔa <i>p^ha</i>
八木 <i>pa mo</i>	ba mo	* <i>p-</i>	霜	ʔa <i>pa mo</i>
體勿 <i>t^hi u</i>	thi'u	* <i>t^h-</i>	書物	
達耳 <i>ta ɤ</i>	dar	* <i>t-</i>	旗	ʔa <i>ta:</i>
奪 <i>to</i>	rdo	* <i>d-</i>	石	ʔa <i>do</i>
卡哇 <i>k^ha ua</i>	kha ba	* <i>k^h-</i>	雪	ʔa <i>k^ha wa</i>
工罷 <i>koŋ pa</i>	rkang pa	* <i>k-</i>	足	ʔa <i>kō^mba</i>
郭 <i>ko</i>	sgo	* <i>g-</i>	門	ʔa <i>go</i>
擦 <i>ts^ha</i>	tshwa	* <i>ts^h-</i>	塩	ʔa <i>ts^ha</i>
咱瓦 <i>tsa ua</i>	rtsa ba	* <i>ts-</i>	根	ʔa <i>tsa wa</i>
宗 <i>tsonj</i>	sjong	* <i>dz-</i>	村	ʔa <i>dzō</i>

以上から、**p^h-*, **p-*, **t^h-*, **t-*, **d-*, **k^h-*, **k-*, **g-*, **ts^h-*, **ts-*, **dz-*が推定できる。

単子音**b*が推定できる例は《打箭爐譯語》には見当たらない。ただしこれは**b*が欠けているのではなく、後に示す子音連続の一部にその存在が確認できる。なお、上に掲げた最後の例のチベット文字形式はまず *sdzong* の誤写と解釈し、チベット文語形式 *rdzong* に対応すると考える。

次に推定に当たって問題のある事例を議論する。これはチベット文字との対応関係もからんでいて、一層複雑になっているが、具体的に問題となるのは、そり舌音と前部硬口蓋破擦音の推定である。結論を先に述べれば、18世紀チベット語打箭爐方言の音素に**ts^h-*, **ts-*, **dz-*, **tɕ^h-*, **tɕ-*, **dz-*が認められる。これにかかわるチベット文字つづりは *c, ch, j* の系列と足字 *y* を伴う *py, ky* などの系列および足字 *r* を伴う *pr, kr* などの系列である。これらのチベット文字形式との対応を基準として議論を進める。

まず、足字 *r* を伴う系列についてである。

川七/漢字音写	川七/蔵文	推定形式	語義	現代語例
真 tʂon	sprin	*tʂ-	雲	ʈrĩ
章 tʂaŋ	brang	*tʂ-	胸	ʈro: ^h go
卓 tʂo	gro	*tʂ-	麦	ʈto
尼嘛支 ni ma tʂi	nyin ma sgrib	—— *dʒ-	太陽がかげる	^h di (Ph)

この系列には、そり舌音が推定できるといえる。そり舌音は、現代チベット語では閉鎖音と破擦音の両者があって、基本的にムニャ方言群では閉鎖音であるが、ここでは推定音を便宜的に破擦音としておく。

次に、足字 *y* を伴う系列についてである。これには、2通りの漢字音写すなわち前部硬口蓋破擦音²⁶とそり舌音が見られる。

川七/漢字音写	川七/蔵文	推定形式	語義	現代語例
且 tʂ ^h ie	phyi	*tʂ ^h -	外	ʈtʂ ^h ə (Ph)
甲 tʂia	bya	*tʂ-	鶏	ʈtʂa
欽巴 tʂ ^h in pa	khyi ba	*tʂ ^h -	妻	
甲索 tʂia so	brgya sog	*dʒ- —	モンゴル	^h dʒa ...
赤卓 tʂ ^h i tʂo	phyi drod	*tʂ ^h -	晩	ʈtʂ ^h ə (Ph)
蛀蛙 tʂu ua	byi ba	*tʂ- —	ねずみ	ʈtʂu wa (Ph)
朝兒井 tʂ ^h au ər tʂin	khyab can	*tʂ ^h -	装甲兵	
准 tʂuən	gyon	*tʂ-	頼む	
章谷 tʂaŋ ko	spyang gi	*tʂ-/ *tʂ- —	狼	ʈtʂ ^h u; ^h tʂə̃ k ^h u (Ph)

以上の例²⁷を総合的に考えると、四川漢語の音体系では前部硬口蓋破擦音は必ず介音 *i* を伴うため、後続母音が前舌の性質を持っていない場合、音写字として前部硬口蓋破擦音が選択されなかった傾向にあったと考えられる。実際、現代チベット語でチベット文字形式の足字 *y* を伴う系列がそり舌音に規則的に対応する方言は見られない。ただし最後の例「狼」については、Rangakha 方言で ʈtʂ^hu のように初頭にそり舌音をもち、また、後続母音についての音写漢字も第2例「鶏」の事例と変わらないため、口語形式がそり舌音であった可能性もあるといえる。

最後に、*c, ch, j* の系列について考察する。この例も先の足字 *y* を伴う系列と同様に、前部硬口蓋破擦音とそり舌音の2通りの漢字音写が見られる。

²⁶ただし現代のチベット語方言、特に Rangakha 方言では、必ずしもこの対応を支持せず、前部硬口蓋摩擦音で現れることがしばしばである（鈴木 2007d）。ただし Phungposhis 方言、Dartsendo 方言では前部硬口蓋破擦音の対応関係を得られ、また Migot (1957) の Dartsendo 方言の例でも前部硬口蓋破擦音で現れていることから、Rangakha 方言では比較的新しい時期に調音法が変化したと分析できる。

²⁷上記第3例のチベット文字形式は文語形式 *khyim pa* を意図していると解釈する。もしくは *khyim pa* の誤写であるかもしれない。

川七/漢字音写	川七/蔵文	推定形式	語義	現代語例
昌 tɕʰaŋ	chang	*tɕʰ-	酒	ˈtɕʰoː; ˈtɕʰõ (sP)
出 tɕʰo	chu	*tɕʰ-	水	ˈtɕʰu; ˈtɕʰu (sP)
扎 tɕa	ja	*tɕ-	茶	ˈtɕa; ˈtɕə (sP)
色耳去谷金	gser chu	— *tɕʰ-		
se ɤ tɕʰyi ko tɕin	gos can	— *tɕ-	錦	... tɕʰu ... tɕẽ
切八 tɕʰie pa	chad pa	*tɕʰ-	法	
甲巴 tɕia pa	jag pa	*tɕ-	盜賊	ˈtɕaː pa

以上の例を見ると、必ずしも明確な条件に基づいて初頭子音の現れが分布しているとはいえないため、チベット語の中でチベット文字形式 *c, ch, j* について2通りの調音が対応していたのかも知れない。現代チベット語方言について見ると、ムニヤ方言群の方言では前部硬口蓋破擦音に一律に対応するが、その周辺部に分布する一部の方言にはそり舌破擦音に対応する方言も存在する。たとえば sProsnang (中路) 方言²⁸などが該当し、上において (sP) で指示して語形式を示した²⁹。

なお、特に *j* に先行する文字が存在する場合は初頭子音 *n* で音写されるものがあるが、これについては後の子音連続の項で扱う。

最後に、《打箭爐譯語》の中でチベット文字形式で独立母音字 *a* を含む例がある。これについて現代チベット語方言では初頭に声門閉鎖音が現れるのが通例であるから、18世紀チベット語打箭爐方言にも*ʔ-を推定する。

川七/漢字音写	川七/蔵文	推定形式	語義	現代語例
阿戎 a zoŋ	a zhang	*ʔ- —	伯父	ˈʔa zoː
呵宜 a ni	a nyan	*ʔ- —	よろしいか	ˈʔa ˈneː (Lh)

4.1.2 摩擦音

現在の康定周辺のチベット語方言では、摩擦音に関して無声有気音・無声無気音・有声音の3系列の弁別を有する方言と無声音・有声音の2系列の弁別を有するものの2種類が存在する。さらに先行研究で扱われる現代カムチベット語のいくつかでも有気・無気の対立が存在しないものもあり、摩擦音の有気性はチベット語の史的発展の中にいかに位置づけられるかが今なお不明である。このため、《打箭爐譯語》のチベット語口語形式には無声音と有声音の2系列を設定するにとどめる。

²⁸ 康定県の北に位置する丹巴県で話される。この方言は鈴木 (2007e) に扱われている。

²⁹ 以上に示したチベット文語形式との対応において2通りの調音点を有するのは、sProsnang 方言と近い方言関係にある Sogpho (梭坡) 方言に見られる (鈴木 2005)。

一方で四川漢語の音体系ではそり舌音のみが無声音と有声音の弁別を行え、齒茎音と軟口蓋音は無声音のみが存在する。

まず、四川漢語の音体系で無声音と有声音の弁別のあるそり舌音の現れに注目する。

川七/漢字音写	川七/蔵文	推定形式	語義	現代語例
沙瓦 sa ua	sha ba	*ʂ-	鹿	ʂ ^h a wə (sP)
申 ʂən	shing	*ʂ-	木	ʂ ^h i h ^h u: (sP)
熱 zɛ	zhwa	*ʐ-	帽子	ʐa; ʂo wə (sP)
阿戎 a zoŋ	a zhang	— *ʐ-	伯父	ʔa zɔ: (sP)
日 zɪ	bzhi	*ʐ-	4	ʔi zɔ (sP)

以上に示した形式から、チベット文字 *sh, zh* が口語においてそり舌音に対応しているといえる。また、有声性については、チベット文字 *zh* が語頭および語中で前接字の有無によらず漢字音写が有声音であることから、常に有声音として実現されていたと考える。そして、これ以外の平行する関係にある摩擦音を表すチベット文字 *s, z* および *h, '* の有声音の現れについても、現代チベット語方言の事例³⁰を参照して、*sh, zh* の事例に対応すると考える。この段階で、次のような推定ができる。

川七/漢字音写	川七/蔵文	推定形式	語義	現代語例
薩 sa	sa	*s-	土	ˉsa
薩麻 sa ma	bza ma	*z- —	ごはん	ʔi za ma
申 ʂən	shing	*ʂ-	木	ʂ ^h i h ^h u: (sP)
日 zɪ	bzhi	*ʐ-	4	ʔi zɔ (sP)
麻亥 ma xai	ma hwes	— *h-	水牛	ˈma xe
臥 o	ˈog	*fi-	下	ˈwo

以上から、*s-, *z-, *ʂ-, *ʐ-, *h-, *fi-が推定できる。

さて、以上の例に関連して、チベット文字 *sh, zh* に漢字音写で *ɕ* を初頭子音に持つ形式が与えられている例がいくつかある。

川七/漢字音写	川七/蔵文	推定形式	語義	現代語例
興肯拉入 ɕin k ^h ən na zo	shing mkhan lha zo	*ɕ- — —	雕像	ˉɕi ...
列希 nie ɕi	ring shig	— *ɕ-	しばらく	
卓行 tʂo ɕin	gro bzhin	— *ʐ-	麵	ˈto ze:

いずれの事例も、そり舌音をもつ漢字でも音写が可能であり、第1例、第3例ともに含まれるチベット文字つづりについて同一のつづりに対しそり舌音で漢字音写

³⁰ 詳細は鈴木 (2007a:221-225; 2007d:140; 2008:53) などを参照。

が与えられている例がある（語義は同じでない）ため、これらに対しての推定口語形式は前部硬口蓋摩擦音を与えることにし、推定される音素に*ɕ-, *ʐ-を認める。

また、チベット文字つづり *z* に漢字音写の初頭子音 *ʐ* が対応する以下のような例もあるが、そり舌音音素/*ʐ*/をもつ四川漢語でも音声的にしばしば歯茎摩擦音 [*ʐ*] で実現される場合がある³¹ため、歯茎摩擦音**ʐ*を推定する。

川七/漢字音写	川七/蔵文	推定形式	語義	現代語例
出戎 tɕʰo zoŋ	chu bzang	— *ʐ-	よい水	... ^{fi} zō
興肯拉入 ɕin kʰən na zo	shing mkhan lha zo	— — — *ʐ-	雕像	... ^{fi} la zo

さて、以下のような例では、現代四川漢語の音体系において歯茎音と前舌狭母音が結合できない条件から、漢字音写で前部硬口蓋摩擦音 *ɕ* であってもチベット文字形式に基づいて歯茎摩擦音**s*と推定できる³²。

川七/漢字音写	川七/蔵文	推定形式	語義	現代語例
心革 ɕin ke	seng ge	*s- —	ライオン	ʼsē ŋge
謝耳瓦 ɕie ər ua	ser ba	*s- —	雹	ˈse wa
席 ɕi	bzigs	*ʐ-	豹	ˈfi zē

ただしこれらについては、千葉(2005:39-40)によると、19世紀末の四川漢語の音体系において「尖団の区別³³」が存在したとされ、その観点から考えるとそれより100年以上前の四川漢語にも存在したと仮定でき、上例で与えられる漢字音写は [*ʐ*] の結合を示すため、的確な音写がなされているといえるかもしれない。

同様に、漢字音写に無気歯茎破擦音が与えられていても、チベット文字形式との対応から、破擦音ではなく有声歯茎摩擦音と推定できる以下のような例もある。この例では特にチベット語口語音の有声性について、四川漢語の無気閉鎖音・破擦音の音声実現が比較的高い有声性を帯びることに基づいた音写と考えられる³⁴。

川七/漢字音写	川七/蔵文	推定形式	語義	現代語例
孜耳罷 tsi ər pa	zil pa	*ʐ- —	露	ʼzi pa
作 tso	zog	*ʐ-	牛	

³¹現代の成都方言などでは/*ʐ*/は/*z*/に変化している。

³²この関係は、破擦音の場合（漢字音写 *tɕ* に対し推定音**ts* など）もあてはまる。

³³[*tsi*]と[*tɕi*]の対立や[*si*]と[*ɕi*]の対立のことをさす。現代の四川漢語の音体系においては、それぞれ[*tɕi*]、[*ɕi*]の側に合流している。

³⁴現代のRangakha方言などでは有声歯茎摩擦音の音声実現が極めて強い摩擦性を伴うことも参考になるかもしれない。

次の例は、《打箭爐譯語》の中でただ1種類の対応関係しか見られないが、同一の形態素に与えられる漢字音写が調音点を同じくする点に注目し、軟口蓋摩擦音*xを推定する。

川七/漢字音写	川七/蔵文	推定形式	語義	現代語例
康 k ^h aŋ	lham	*x-	靴	ˈxā
項均 xaŋ tɕyin	lham byon	*x- —	靴を履く	ˈxā ˈtɕõ

第2例第1字は故宮本では「頂」になっているが、「項」の誤写と解釈し、訂正の上掲げた。現代チベット語方言を参照すると、チベット文字形式 lh には、後に扱うように、無声歯茎流音 l̥ に対応するのが通例であるが、「靴」のチベット口語形式については語彙的に特殊な対応を示し、軟口蓋摩擦音 x で現れる方言もあるため、以上の推定に問題はないと判断する³⁵。

4.1.3 共鳴音（鼻音・流音・半母音）

現在の康定周辺のチベット語方言では、鼻音および歯茎流音の系列に無声音・有声音の2系列の弁別を有する。この状況はカムチベット語全般を見ても同様であるため、18世紀チベット語打箭爐方言に無声音と有声音の2系列を設定することは妥当である。なお、半母音は現代チベット語でも有声音のみが存在するため、推定される形式も有声音のみと考える。

現代のチベット語で鼻音が無声音として実現されるのは、チベット文字の鼻音字に頭字 s が先行する場合にほぼ限られる。この点に注目してみると、《打箭爐譯語》では漢字による音写で鼻音系列に無声音・有声音の書き分けは全体的になされていないが、無声鼻音に摩擦音の音写が与えられることがある。以下に軟口蓋鼻音についての例を対照する。

川七/漢字音写	川七/蔵文	推定形式	語義	現代語例
峨 ŋo	ngo	*ŋ-	顔	ˈk ^h a ŋo
烘布 xoŋ pu	sngon po	*ŋ- —	青	ˈŋõ ˈmbo

チベット文字形式・現代語を参考に、「顔」の初頭子音は*ŋ-と推定することに問題はない。ここで、「青」では音写漢字として軟口蓋摩擦音をもつ字が用いられている。現代チベット語方言を参照すると、無声鼻音に相当することから、チベット語

³⁵sProsnaŋ 方言の「靴」 ˈn̥dza ˈh̥xu の第2音節に該当する。Rangakha 方言では xā と ʈā: の2種があり、前者に該当する。

の無声鼻音の継続性を音写漢字で同じ調音点の摩擦音を表したと推定し、*ŋ-を認めるのに困難はない。この対立例を根拠に、同様に蔵文で頭字 s を伴う例には無声鼻音を認める。

両唇鼻音についても、同様に*m-, *m̥-を推定することにする。

川七/漢字音写	川七/蔵文	推定形式	語義	現代語例
木的 mo tie	mu rig	*m- —	真珠	ʼmu ti:
木罷 mo pa	smug pa	*m̥- —	霧	̃mu pa

歯茎で調音される共鳴音は、先にも具体的に示したように、漢字音写で初頭子音に n を含むもので音写される。さらに、前部硬口蓋鼻音も漢字音写で初頭子音に ni を含むもので音写される。チベット文字形式に反映される異なりは現代チベット語口語においてもなお弁別的であるため、チベット文字形式に基づいた口語音の推定が妥当である。

川七/漢字音写	川七/蔵文	推定形式	語義	現代語例
浪 naŋ	gnam	*n-	空	̃nã ŋkʰa:
納 na	sna	*n̥-	鼻	̃h̥na
弄 noŋ	rlung	*l-	風	̃lõ
洛 no	lho	*l̥-	南	̃l̥o
達零 ta nin	da ring	— *r-	今日	ʼte ri
念 nian	nywa	*ŋ-	魚	̃ŋa
呢接 ni tɕie	snyi rjes	*ŋ̥- —	憐憫	̃ŋ̥i: ̃dze

以上から、*n-, *n̥-, *l-, *l̥-, *r-, *ŋ-, *ŋ̥-が推定できる。

さて、チベット語の*r-に対して与えられる漢字音写は上例以外にもさまざまあり、以下のような対応が見られる。

川七/漢字音写	川七/蔵文	推定形式	語義	現代語例
耳工 ɛ̃ koŋ	ri bung	*r- —	うさぎ	ʼri ko:
阿仍 a zɛ̃n	ring	*r-	長い	ʼrĩ bu
額勒 (ŋ) e ne	ras	*r-	布	ʼrɛ:

このことは、現代チベット語の r 音をめぐる音声実態から容易に推測できる現象である。カムチベット語の多くの方言では/r/が [r, z, ʔr] といったような音声で現れる。先に示した「長い」「布」の例で、2つの漢字すなわち2音節から1音節語を推定す

る手続きにおいては、特に第3例について第1字の漢字が母音のみを表した³⁶と考え、先述のように現代チベット語で語頭がrの場合入りわたりの声帯振動が起こりうる事実を参考に、推定されるチベット語の音価としては初頭子音をrとする1音節語とすることに十分な妥当性があると考ええる。

さらに、チベット語の*l̥に対して軟口蓋摩擦音で音写される例もある。この対応は、チベット文字形式でlhのみに見られるが、上述の無声鼻音を摩擦音で表すのと平行的な音写方法で、このチベット文字形式が*xを表していたと断定することはできない。チベット文字形式lhに漢字音写の初頭子音がnで表されるものもあり、また現代チベット語方言形式もl̥を示す。それゆえ*l̥を推定しておく。

川七/漢字音写	川七/蔵文	推定形式	語義	現代語例
海衣禿節 xai yi t̥h u t̥ɕie	lha'i thuge	*l̥- — — —	重要な宝	ṽla ...
哈 xa	lhag	*l̥-	鷹	ṽh̥l̥aʔ
訥 na	lha	*l̥-	神	ṽla
喇亢 na k̥h̥aŋ	lha khang	*l̥- —	寺院	ṽla k̥h̥õ

次に、半母音についてである。

川七/漢字音写	川七/蔵文	推定形式	語義	現代語例
瓦 ua	wa	*w-	狐	ṽwa
羊 iaŋ	yang	*j-	広い	jõ (Ph)

*w-, *j-の推定は問題のないものである。

以上の手続きによって、《打箭爐譯語》に記録された言語における初頭の単子音の推定音が判明した。

4.1.4 子音連続

《打箭爐譯語》の漢字音写には、すでに3.2節で扱ったように、四川漢語の音声的特徴が反映されていると分析できる前鼻音と前気音を含む子音連続を表したチベット語形式が見られる。

前鼻音は、現代チベット語方言の対応関係からも考えて、チベット文字つづりで有声音字もしくは有気音字に前接字m, 'が伴うものに確認でき、実際《打箭爐譯語》の問題となる漢字音写についてもそのような対応関係を得ることができる。

³⁶四川漢語のいくつかの方言では、初頭子音が存在しないと記録されている字についても軟口蓋鼻音が現れる例が散発的に確認される。

*^NC- (前鼻音) の推定

川七/漢字音写	川七/蔵文	推定形式	語義	現代語例
沒耳納 mo ɤ̃ na	'brus sna	* ^N br- —	五穀	
捏噶月 nie ka ye	'di ga yod	* ^N d- — —	所有する	ⁿ də ...
俄 ɣo	mgo	* ^N g-	頭	ⁿ go
洛 no	'gro	* ^N qz-	行く	ⁿ qo
捏納 nie na	'jang nag	* ^N dz- —	藍	

語中に現れる前鼻音要素は、漢字音写で前鼻音部分が先行音節末に現れていると見られる例がある。このような例についても、推定される形式は後続音節初頭子音における前鼻音つき子音として考える。

川七/漢字音写	川七/蔵文	推定形式	語義	現代語例
安則 ɳan tse	ngo mdzang	— * ^N dz-	好生*	
干戎 kan zɔŋ	dga' 'dzol	— * ^N dz-	興隆	
甘菊 kan tɕyo	dka' 'gyur	— * ^N dz-	お経	^h ka ⁿ dzur:
長情 tɕ ^h ɑŋ tɕ ^h in	phyag 'tshal	— * ^N ts ^h -	ぬかづく	^h tɕ ^h ɑŋ ⁿ ts ^h a:
散創 san ts ^h uaŋ	sa 'tsham	— * ^N ts ^h -	地界	^h sa ⁿ ts ^h a:

以上の事実から、18世紀チベット語打箭爐方言では有声音と無声有気音に付加される前鼻音を体系的に維持していたものと理解できる。現代のチベット語方言から考えても、前鼻音が特定の語で脱落したりするような現象は想定できない。ここで注目すべきは、《打箭爐譯語》の中にはチベット文字形式で、一般に前鼻音に対応する前接字 *m*, *'* を持つ形式に対する音写漢字に鼻音要素が含まれていないものが少なからず存在するのである。これらについては、音写漢字の表しうる範囲を超えて前鼻音を推定することが可能であり、かつ体系性を考えると推定すべきといえる。

川七/漢字音写	川七/蔵文	推定形式	語義	現代語例
卜耳 p ^h o ɤ̃	'phur	* ^N p ^h -	飛ぶ	^m p ^h ũ
托 t ^h o	mtho	* ^N t ^h -	高い	ⁿ t ^h õn
作 tso	mdzo	* ^N dz-	犏牛	ⁿ dzo

以上に示したものと同様の漢字音写が用いられていたとしても、チベット語として前鼻音が期待されない箇所には、前気音を推定するのが妥当である。その根拠は3.2節ですでに示した。

*^HC-（前気音）の推定

川七/漢字音写	川七/蔵文	推定形式	語義	現代語例
捏当白 nie taŋ pe	rgya dang bod	* ^H dʒ- — —	チベット人と漢人	^ʰ dʒa ...
捏馬 nie ma	brgya ma	* ^H dʒ- —	斤	^ʰ dʒa ma (Da)

さて、18世紀チベット語打箭爐方言には、音写漢字2字でもってわたり音として*rを含む子音連続を表したものがみられる。これはチベット文字形式と対応させるとよく理解でき、また現代の sProsnang 方言に見られる現象につながるものであろう。

*Cr-の推定

川七/漢字音写	川七/蔵文	推定形式	語義	現代語例
不里 pu ni	bri	*pr-	書く	^ʰ prə mə (sP)
波郎積 po naŋ tɕie	sbraŋ rtsi	*br- —	蜜	^ʰ brō mə (sP)
木慮 mo lyi	sbrul	* ^H br- / * ^N br-	蛇	^ʰ bru: (sP)

いずれもわたり音 r に先行する子音は両唇音である。また、以上の例のうち、第3例「蛇」については、チベット文字形式および先に行った議論に基づけば、前気音を与えることが妥当となるが、現代のチベット語方言たとえば sProsnang 方言の「み年」^ʰmbrɛ: や dGudzong（格宗）方言³⁷の「蛇」^ʰqɪ: tɕɔ? のように前鼻音を伴うものも存在する³⁸ため、前気音と前鼻音のどちらを推定するかは現在決定できない。

《打箭爐譯語》に記録されたチベット語の初頭子音の構造は、以上のようなのである。

4.2 母音＋末子音

ここでは母音＋末子音の形式の推定について議論する。

4.2.1 母音のみ

母音の推定は、概して初頭子音よりも困難である。その主な原因には、漢語とチベット語の母音組織が完全に異なるものであるといえる点、現代チベット語方言でも対応関係が相当な程度でばらつきがある点などがあげられる。

初頭子音推定の際にも問題となったが、四川漢語は声母と韻母の結びつきに大きく制限があるため、その制限とチベット語側の事情を背景とする問題が生じる。こ

³⁷sProsnang 方言と同様、丹巴県で話される。系統的にも sProsnang 方言ときわめて近い。

³⁸これに関連する他の方言の例や議論は鈴木 (2007c:171) を参照。

ここでは、18 世紀チベット語打箭爐方言に認められうる母音音素および末子音の推定を目的として議論する。

漢字音写およびチベット文字つづりから帰納して推定できる母音を見ていく中で、まず推定に困難の見られないものをまとめて示すと、以下のようなものがある。

川七/漢字音写	川七/蔵文	推定形式	語義	現代語例
尼嘛 ni ma	nyi ma	*-i *-a	太陽	ʼŋi ma
格 ke	skas	*-e	はしご	ʰke: (Ph)
咱 tsa	rtswa	*-a	草	ʰtsafi / ʰtsa
奪 to	dog	*-o	狭い	ʼto: to:
奴馬 nu ma	nu ma	*-u *-a	乳房	ʼnu ʱma
慮 nyi	lus	*-u	体	ʼlu ʰpu (Ph)

これらの例では、漢字音写、チベット文字形式そして現代チベット語を考えても、推定に問題はなく、*-i, *-e, *-a, *-o, *-u, *-u が推定できる。

次に、漢字音写の母音に ai が含まれるいくつかの例を考える。結論として、以下に示す例における母音には*ɛ を推定する。

川七/漢字音写	川七/蔵文	推定形式	語義	現代語例
愛 ɲai	mngar	*-ɛ	甘い	ɲa: mo
該布 kai pu	dkar po	*-ɛ —	白い	ʰka: ʱbo
脈兒 mai ər	mar	*-ɛr	バター	ma:

以上の例で争点になるのは、チベット文字つづり *ar* に対応する漢字音写に含まれる ai がいわゆるチベット語の二重母音を表したかそうでないかということであるが、第 3 例の漢字音写形式を見ると、後に議論するように、末子音に**r* を推定できる音写となっている。もし末子音が保存されているなら、現代チベット語の例の事例から二重母音と音節末子音が共起する点が問題となる。そのため、第 3 例の母音は*a ではない母音、たとえば*e や*ɛ を表していると考えられる。ここで第 2 例に注目すると、もし*e が推定できるなら第 1 字の漢字音写は「格 ke」などの漢字を用いることができるため、「該 kai」を用いる必要はない。このことからチベット文字つづり *ar* に対応する漢字音写 ai が表す母音を*ɛ と推定する。

次に、漢字音写において初頭子音をそり舌音とする例について考える。

川七/漢字音写	川七/蔵文	推定形式	語義	現代語例
日 zī	bzhi	*-ə	4	ʱzə (sP)
直 tṣī	grwi	*-ə	刀	ʼtə
出 tṣʰo	chu	*-ɣ	水	ʼtṣʰu (sP)
出 tṣʰo	mchu	*-ɣ	唇	ʼtṣʰu ʰku (sP)

以上に示したのは、チベット文字形式に注目して上半分を母音 *i*、下半分を母音 *u* であるものに分け、漢字音写の現れを見たものである。以上に示す限り、漢字音写の母音の現れは使い分けられていると考えられるため、現代チベット語方言の事例を参照して、18 世紀チベット語打箭爐方言の形式にチベット文字形式 *i#*³⁹を持つものを **ə*、*u#*を持つものを **ɤ* と推定する⁴⁰。

次に、特に先に述べた語中における前鼻音の推定に際して、チベット文字形式との対応関係と漢字音写における *an* と *aŋ* の使い分けには一定の対応関係が見られ、それゆえ **a* と **ɑ* が異なった音素であると推定できる⁴¹。

川七/漢字音写	川七/蔵文	推定形式	語義	現代語例
甘菊 <i>kan tɕyo</i>	<i>dka' 'gyur</i>	*-a * ^N dʒ-	お経	^h ka ⁿ dʒu:
散創 <i>san ts^huaŋ</i>	<i>sa 'tsham</i>	*-a * ^N ts ^h -	地界	^h sa ⁿ ts ^h a:
長情 <i>ts^haŋ tɕ'in</i>	<i>phyag 'tshal</i>	*-ɑ * ^N ts ^h -	ぬかづく	^h tɕ ^h aŋ ⁿ ts ^h a:

以上のような広母音の前舌および後舌の対立は、現代のカムチベット語のほとんどに備わった特徴でもあり、18 世紀チベット語打箭爐方言の場合、チベット文字形式で *aŋ* となっている形式のいくつかは後舌広母音 *ɑ* と推定できるといえる。

《打箭爐譯語》全体を見て推定される母音のみの形式は、以上の通りである。

4.2.2 母音+鼻音

漢字音写形式で韻母に鼻音を含む形式には *an*, *ian*, *uan*, *yan*, *ən*, *in*, *uən*, *yin*, *aŋ*, *iaŋ*, *uaŋ*, *oŋ*, *ioŋ* がある。現代四川漢語の音韻体系では、末尾 *n*、末尾 *ŋ* が体系上弁別的であるが、現代では音声実現としてはすべて鼻母音となる傾向が強く、すべて音質の異なる鼻母音として認める立場も容認される。*an* と *aŋ* はそれぞれ [ã] と [ɑ̃] で実現されうするため、ここに調音点の違いを認めることができる⁴²。また、チベット文字形式についても、チベット文語形式では異なる鼻音に対してアヌスヴァーラ⁴³を用いて表記しているものが複数存在する。たとえば、以下のような例がある。

³⁹ *#*は先行字に何も後続しないことを表す。

⁴⁰ 多くの現代カムチベット語方言ではチベット文字形式 *i#* には *ə* が、*u#* には *ɤ* が対応する。ここでは、この *ɤ* の現れる位置に対応する 18 世紀チベット語打箭爐方言の推定形式に **ɤ* を用いた。これは漢字音写の母音 *o* と調音点の高さをそろえた便宜上の措置であるが、本稿で採用している四川漢語音では /u/ と /o/ は対立するため、母音の高さは考慮しうるものである。

⁴¹ 音写漢字の *an* と *aŋ* の現代四川漢語における実際の音価は、後に述べるが、それぞれ [ã] と [ɑ̃] で近似できる。

⁴² ただし表記の上では末鼻音を便宜上残す。

⁴³ デーヴァナーガリー文字においてある文字の上に点で表される調音点の特定されない鼻音をさす名称で、《打箭爐譯語》のチベット文字形式においてもある文字の上に付加されて鼻音を示す。

川七/蔵文	文語形式	語義
sbraṃ rtsi	sbrang rtsi	蜜
dom	dom	熊

康定周辺の現代チベット語口語形式においても、末鼻音は直前の母音を鼻母音化して脱落した形式に対応するのが通例である。これらのことから、チベット語打箭爐方言の推定形には末鼻音として、調音点未指定の鼻音化要素_Nを認定する。推定形式の例に、以下のようなものがある。

川七/漢字音写	川七/蔵文	推定形式	語義	現代語例
只頂 t̥ṣi tin	'jig rten	— *-i _N	世界	
勒頂 ne tin	gnas brtan	— *-e _N	羅漢	
慢夷 man i	sman yig	*-a _N —	医学書	ṁe: ...
桑 saŋ	gsum	*-a _N	3	ṁsā (dG)
凍 toŋ	stong	*-o _N	1000	ṁtoŋ
頓 tən	bdun	*-ə _N	7	ṁdū:

4.2.3 母音+共鳴音

漢字音写とチベット文字形式を対照させたとき、後者の音節末の r もしくは l が漢字音写に ʁ として現れている場合があり、その要素をチベット文字形式に従って *r または *l を推定することに問題はない⁴⁴。

川七/漢字音写	川七/蔵文	推定形式	語義	現代語例
毒耳 to ʁ	rdul	*-ol	塵	
孜耳罷 t̥si ʁ pa	zil pa	*-əl —	露	'zi pa
沙兒 ʃa ʁ	shar	*-ar	東	ṁʃa:
謝耳哇 ɕie ʁ ua	ser ba	*-er —	雹	ṁse wa

ただし以下の例を見ると、語中に現れる共鳴音 *r の推定は、チベット文字形式から考えると、第2音節初頭の子音と考えられるけれども、このような組み合わせは《打箭爐譯語》内に類例がないため、第1音節末子音として推定する。

川七/漢字音写	川七/蔵文	推定形式	語義	現代語例
兎爾結 t̥u ʁ t̥eie	thugs rje	*-ur *dz-	恩	ṁt̥uʔ ṁdze

⁴⁴ただし現代の康定周辺のチベット語方言には必ずしも例証されない。

チベット文字形式で末子音 *b* に与えられる漢字音写から、以下のように音節末に円唇性を伴う例が推定できる⁴⁵。

川七/漢字音写	川七/蔵文	推定形式	語義	現代語例
交 tɕiau	rgyab	*-aw	後ろ	^{-fi} dza la
卯甲 mau tɕia	rma bya	*-aw —	孔雀	'ma tɕa

《打箭爐譯語》の中では*-aw の組み合わせのみが推定できる。

4.2.4 音節末に声門閉鎖音を伴う可能性について

いくつかの四川漢語の音体系では入声由来の字が独立した声調体系を持っており⁴⁶、18世紀の四川漢語には音節末に何らかの閉鎖をもつ方言が存在した可能性がある。しかし本稿で漢字音写の表す音の推定に参考にした漢語方言は入声独立声調型ではなく、《打箭爐譯語》序文の示す地域で話される漢語方言にも現在では見られない。

一方で現代チベット語方言のカムチベット語を中心に音節末に声門閉鎖音を伴うものが多く観察される。しかしながら、康定周辺のムニャ地域のチベット語方言では、他のカムチベット語と異なって、音節末に声門閉鎖音を伴う語が少ない、すなわち、ほぼ開音節型をとっているのも事実である⁴⁷。

《打箭爐譯語》の漢字音写を見た場合、確かに入声字と音節末子音を伴うチベット語との対応は確認できる。以下に示す例の音写漢字は全て入声字である。

川七/漢字音写	川七/蔵文	推定形式	語義	現代語例
托 t ^h o	thog	*t ^h o / *t ^h oʔ	雷	^{-fi} t ^h o:
洛 no	glog	*lo / *loʔ	電気	^{-fi} lo:

ただし、チベット語側に音節末子音を期待できない例にも入声字が用いられている。

川七/漢字音写	川七/蔵文	推定形式	語義	現代語例
托 t ^h o	mtho	*N ^t h ^o	高い	^{-fi} t ^h ōn
格 ke	skas	*ke	はしご	^{-fi} ke: (Ph)
谷 ko	dgu	*gɣ	9	^{-fi} gu

⁴⁵このことは逆に、以下に示す漢字音写に与えられるチベット文字形式を見ることによっても明らかである。

川七/漢字音写	川七/蔵文	語義
樟腦 tɕaŋ nau	lcam lab	樟腦

この例の漢字音写第2字「腦」とチベット文字形式 *lab* が対応する。

⁴⁶特に岷江流域で話される方言に多い。

⁴⁷Rangakha 方言にはこの現象が顕著に見られる。

実際、《打箭爐譯語》全体を見ると、以上のように音節末子音を期待できないところに用いられる入声字は多いのである。それゆえに、《打箭爐譯語》には入声字と音節末子音を伴うチベット語との対応が見られるとしても、それを表すことを意図して入声字を使用したとはいえず、単に母音の音価を近似させるために用いた可能性が高い。

以上のことから、音節末に声門閉鎖音を確定的に推定するには《打箭爐譯語》全体から見た漢字の用いられ方を議論する必要があるが、本稿は漢字の性質を中心とした議論ではないため、後の課題として指摘するにとどめる。

4.3 《打箭爐譯語》の音体系

これまでに行った議論の結果を整理すると、《打箭爐譯語》記録言語の音体系を以下のように示すことができる。

		i	u	u		
【母音】		e	ə	ɤ	o	
		ɛ				
		a	ɑ			
閉鎖音	無声有気	p ^h	t ^h		k ^h	
	無声無気	p	t		k	
	有聲	b	d		g	
破擦音	無声有気		ts ^h	tɕ ^h	tɕ ^h	
	無声無気		ts	tɕ	tɕ	
	有聲		dz	dʒ	dʒ	
【子音】 摩擦音	無声		s	ʃ	ɕ	x h
	有聲		z	ʒ	ʒ	fi
鼻音	有聲	m	n		ɳ	ŋ
	無声	m̥	n̥		ɳ̥	ŋ̥
流音	有聲		l	r		
	無声		l̥			
半母音		w			j	

また、声調が存在したと考えられるけれども、その分析は別稿で扱いたい。

音節構造は^cCGVCと帰納でき、^cには前鼻音^N、前気音^Hの2種、Gにはrが現れうる。末子音Cには、r, l, w および鼻音化要素^Nが現れうる。

5 18世紀チベット語打箭爐方言の性格

ここでは、前節の手続きによって得られた《打箭爐譯語》に記録された18世紀チベット語打箭爐方言に含まれる音体系および語形式から、この方言の特徴を考察し、方言の所属について議論する。

方言所属の考察の際、実際問題として音体系の特徴から特定の方言群の特徴を見出すことは、現代のチベット語方言研究の事例に照らして困難である。ゆえに、現代チベット語の場合と基本的に変わず、記録された語形式とチベット文字形式との音対応を分析するほうがより確実であろう⁴⁸。

《打箭爐譯語》に記録された語形式それ自体が特徴的であるものに、以下のようなものがあげられる。

川七/漢字音写	川七/蔵文	推定形式	語義
哈 xa	lhag	*l̥a	鷹
阿 (ŋ)a	'gag	*N̥ga	ガチョウ
呵宜 a ni	a nyan	*ʔa ŋi	よろしいか
康 k ^h aj	lham	*xan	靴
念 nian	nywa	*ŋan	魚
硬 ŋin	dngul	*ŋin	銀
桑 saŋ	gsum	*san	3

以上に示した語のうち、上半分はチベット語として語形式自体が特殊であるもの、下半分はチベット文字形式が表そうとする音価として一般的な形式を示しているが与えられる漢字音写が特殊なものである。

まず、第1例「鷹」はチベット文語ではおそらく *glag* に対応する語であろう。現代のいくつかの、特にカムチベット語の方言には、「鷹」に《打箭爐譯語》と同じく無声歯茎流音が現れる方言がある。ムニャ方言群でも Rangakha 方言^hl̥aʔ がそれに当てはまる。ほかにも sProsnang 方言^hl̥a: などもあり、現在の康定付近に分布する方言に複数見られる。

第2例「ガチョウ」はチベット文語ではおそらく *gag* に対応する語である。《打箭爐譯語》ではおそらく前鼻音を伴っていたと考えられるチベット文字形式、漢字音

⁴⁸西 (1986) は方言分類の観点からチベット文字形式と口語形式の音対応における着目点を整理している。西田 (1987:137-140) にもチベット語歴史研究における着目点が示されている。そもそも方言分類を行うときの基準はチベット語方言の歴史を探る方法と重なり、互いの作業は共通する部分が多い。以下のチベット文字形式との音対応をめぐる議論でも参考となる。

一方で語形式の分析は、まとまった数の地点の方言資料が存在するならば、地域特徴をとらえられる可能性がある。これについては、鈴木 (2007a:292-348) や Suzuki (2009:20-32) のような議論がある。

写が与えられている。この形式は、現在でもなお Rongbrag（章谷）方言⁴⁹の^ʰga: という音形式に一致すると見られる。この方言以外では現在のところ報告がない。

第3例「よろしいか」は疑問文の形式をとっている。チベット文字形式 *a* が疑問標識、*nyan* が「よい」という意味である。後者の語義については、鈴木 (2007a:328) に地図化されて示されており、「よい」という意味で **ni* に近い音形式を用いるのは、康定付近に分布する方言にのみ見られ、他の地域の方言には見られないということが一目で分かる。このことから、《打箭爐譯語》の「よろしいか」の項目に、当該の推定形式が記載されていることは、確かに現在の康定付近に分布する方言に近い関係にある方言を記録したものであるということができるといえる。

また、第4例「靴」は初頭子音に軟口蓋摩擦音が推定される点が Rangakha 方言 *xā* などの形式とつながり⁵⁰、第5例「魚」は音節末に鼻音が推定される点が Sogpho 方言 *ṇā*、sProsnang 方言 *ṇwā* などの形式と共通し⁵¹、第6例「銀」も母音の調音点および音節末の鼻音についての推定形式が、これもまた Sogpho 方言 *ṇi*、sProsnang 方言 *ṇi* などの形式と共通する⁵²ことが指摘できる。第7例「3」は母音の調音点が後舌広母音と推定されるのは、dGudzung 方言 *ṣā* と共通する⁵³。

以上の点は、《打箭爐譯語》に記載される語の中のわずかの例である。先行研究である西田・孫 (1990:33) も述べるように、大部分は標準的な語形を示しているが、その中であって、以上に述べたように、極めて地域特徴の強い形式を記録していることが分かり、記録された方言が現在の康定付近に分布する方言に極めて近い関係を持つものであるということができると考える。

次に、方言所属をより詳細に検討するため、チベットと文字形式と音写漢字の対応関係のうちのいくつかに注目する。たとえばチベット文字 *sr* に対応するのは、以下に示すように、基本的に歯茎摩擦音 *s* を推定できる。

川七/漢字音写	川七/藏文	推定形式	語義
撒 <i>sa</i>	<i>bsra</i>	* <i>sa</i>	硬い
松扛 <i>soŋ kaŋ</i>	<i>sraŋ gaŋ</i>	* <i>soŋ kaŋ</i>	1 両
甲息 <i>teia ci</i>	<i>rgyaṃ srid</i>	* <i>dza si</i>	領地

⁴⁹sProsnang 方言や dGudzung 方言などときわめて近い関係にある方言である。詳細は鈴木 (2008) を参照。

⁵⁰チベット文字形式から期待されるのは、無声歯茎流音である。

⁵¹チベット文字形式から期待されるのは、音節末鼻音を伴わない開音節形式である。

⁵²チベット文字形式から期待されるのは、母音の質についてはさまざまであるが、非鼻母音であると考えられる。

⁵³チベット文字形式から期待されるのは、後舌（半）狭母音である。

この特徴を現代のカムチベット語方言と対比させると、康定付近に分布する方言ムニャ方言群⁵⁴を含む多くのカムチベット語に一致する特徴である。この対応関係には、ほかにそり舌摩擦音 ɬ となる方言があるため、確認すべき点の1つであった。

次に注目するのは、チベット文字 *Py* (= *py*, *phy*, *by* など) に対応する《打箭爐譯語》のチベット語の音形式である。これらには基本的に前部硬口蓋破擦音が推定される。この特徴は上に言及された *dGudzung* 方言、*Sogpho* 方言、*sProsnang* 方言などの方言群（「二十四村方言」と呼ばれる）の特徴とは完全に符合しない。これらの方言群では歯茎破擦音で現れ、これは《木坪譯語》に記録された言語の推定音と一致し、すでに鈴木 (2007bc) がその事実を指摘した上で、他の音特徴の類似性にも言及しつつ《木坪譯語》のチベット語と二十四村方言の系統関係を認めている。このことから、《打箭爐譯語》のチベット語と二十四村方言は互いに系統上離れているといえる⁵⁵。この要素に対する《打箭爐譯語》のチベット語の音対応は、*Rangakha* 方言などムニャ方言群の方言に見られ、この方言群とのつながりのほうがチベット語音変化史の観点から見ると肯定的にとらえられる。

一方でチベット文字 *c*, *ch*, *j* に対応する《打箭爐譯語》のチベット語の音形式は前部硬口蓋破擦音とともにそり舌音が推定される。この特徴は、実際には現在の二十四村方言に見られ、ムニャ方言群の方言には見られない。特に《打箭爐譯語》のチベット語のように2つの系列の調音点に関わるのは、*Sogpho* 方言の事例にやや近い。

そしてチベット文字形式 *sh*, *zh* に対応する《打箭爐譯語》のチベット語の音形式は、基本的にそり舌摩擦音である。この文字形式に対応する現代チベット語方言での音対応は鈴木 (2007a:200-206) に示されており、この特徴は二十四村方言などかなり限定された地域の方言に見られるのである。

これらの特徴を考えると、18世紀チベット語打箭爐方言は、現在の二十四村方言とムニャ方言群の両方の特徴を兼ね備えていたと見られる。しかし一方、鈴木 (2007bc) によれば、二十四村方言に直結する18世紀の言語に《木坪譯語》のチベット語木坪方言があって、《木坪譯語》の記録の方が全般的に二十四村方言と酷似する特徴を備えている。よって、《打箭爐譯語》に記録された言語は、基本的に現代のムニャ方言群につながるチベット語方言を記録したと考えたい。この結論は、すなわち《打箭爐譯語》に記録された18世紀の打箭爐方言とムニャ方言群の系統的關係が認められるということで、これはまた現代ムニャ方言群の分布とも符合している。《打箭爐譯語》に記録された形式の中に二十四村方言に近い特徴を含んでいるのは、現代ムニャ方言群の分布地域の中でも二十四村方言の分布地域の近隣で話されていた方言、

⁵⁴ただし *Lhagang* (塔公) 方言を除く (鈴木 2006a)。

⁵⁵鈴木 (2006b) や Suzuki (2009) の分析では、ムニャ方言群と二十四村方言では下位区分としてそれぞれ独立していると結論されている。

すなわち現代の康定に近い地域の変種を記録したのではないかと推測することも可能であろうが、現段階では断定できない。

6 まとめ

本稿では、《打箭爐譯語》に記録された18世紀チベット語打箭爐方言の音素体系の推定を試み、またその言語のもつ特徴を現代のチベット語方言との関連という視点から分析した。その結果、《打箭爐譯語》に記録されたチベット語は、確かに現代のムニャ地区に分布する諸方言によく似た特徴をもった言語であることが判明し、18世紀のムニャ方言群の1方言の記録であると結論づけた。

孫宏開等(2007:142)は、《木坪譯語》と《打箭爐譯語》の2種がカムチベット語下位方言の比較研究のよい資料であると述べている。《木坪譯語》に関する先行研究と本稿の議論によって、これら2種の文献に記録された方言の所属する下位方言区分が異なったものであることが判明した。その議論の過程において、現代チベット語方言の研究が大きな役割を担っている点で、先行研究とは異なっている。

今後現代四川漢語、チベット語双方の詳細な調査研究が進むことによって、《打箭爐譯語》の推定形式の精度が高まることは十分期待される。その一方で、その他の丁種本《西番譯語》についても同様の手法によって、先行研究の指摘する特徴から一歩踏み込んだ形式を推定することができ、記録された言語の全体的特徴がより明確になることも期待されるだろう。

参考文献

- 池田巧 (2007a) 『東チベットの言語分布と伝播経路を探究するための地名研究』 科学研究費補助金萌芽研究（課題番号 166520258）研究成果報告書
- (2007b) 「《西番譯語》に記録されたリュズ語」 福盛・遠藤編 95-106
- 太田斎 (2008) 「[資料] 丁種西番訳語 (川一) 校本 (稿)」 『アジア言語論叢』 7, 109-164
- 鈴木博之 (2005) 「チベット語丹巴・梭坡 [Sogpho] 方言の音声分析」 『ニダバ』 第34号 96-104
- (2006a) 「チベット語塔公 [Lhagang] 方言の方言特徴とその背景」 『ニダバ』 第35号 39-47
- (2006b) 《九香線上的藏語方言對比研究》 第4屆兩岸三地藏緬語族語言學學術專題討論會發表論文

- (2007a) 『川西民族走廊・チベット語方言研究』 京都大学博士論文
- (2007b) 〈清代木坪土司所管地区的藏語方言〉《康定民族師範高等專科學校學報》第3期 1-5
- (2007c) 「丁種本《西番譯語》〈川六〉に記録される18世紀木坪チベット語の特徴」『内陸アジア言語の研究』XXII, 157-180
- (2007d) 「カムチベット語康定・新都橋[Rangakha]方言の音声分析」『アジア・アフリカの言語と言語学』第2号 131-162
- (2007e) 「チベット語中路[sProsnang]方言の/r/を含む子音連続」『東京大学言語学論集』第26号 31-47
- (2007f) 「丁種本《西番譯語》〈川九〉に記録される18世紀木里チベット語の特徴」福盛・遠藤編 83-94
- (2008) 「ギャロン地域のカムチベット語・丹巴県蒲角頂[Rongbrag]方言の音声分析と語彙」『国立民族学博物館研究報告』2008-33 巻1号 39-80
- 千葉謙悟 (2005) 「『西蜀方言』における19世紀最末期の四川方言音系」千葉謙悟他編『百年前の四川方言—『華英聯珠分類集成』と『西蜀方言』—』37-49 中国古籍文化研究所
- 西義郎 (1986) 「現代チベット語方言の分類」『国立民族学博物館研究報告』11巻4号 837-900 + 1 地図
- 西田龍雄 (1963) 「十六世紀における西康省チベット語天全方言について—漢語・チベット語単語集いわゆる丙種本『西番館譯語』の研究—」『京都大学文学部研究紀要』第7, 85-174
- (1970) 『西番館譯語の研究—チベット言語學序説—』松香堂
- (1973) 『多續譯語の研究—新言語トス語の構造と系統—』松香堂
- (1987) 「チベット語の変遷と文字」長野泰彦・立川武蔵編『チベットの言語と文化』108-169 冬樹社
- (2002) 『アジア古代文字の解説』中央公論新社
- 西田龍雄・孫宏開 (1990) 『白馬譯語の研究 白馬語の構造と系統』松香堂
- 福盛貴弘・遠藤光暁編 (2007) 『華夷訳語論文集』(語学教育フォーラム 第13号) 大東文化大学

- Migot, André (1957) Recherches sur les dialectes tibétains du Si-K'ang (province de Kham), en : *Bulletin de l'École Française d'extrême-orient* tome XLVIII, 417-562
- Suzuki, Hiroyuki (2009) Introduction to the method of the Tibetan linguistic geography — a case study in the Ethnic Corridor of West Sichuan —, in : Yasuhiko Nagano (ed.) *Linguistic Substratum in Tibet — New Perspective towards Historical Methodology* (No. 16102001) Report Vol.3, 15-34
- 馮蒸 (1981) 〈《華夷譯語》調查記〉《文物》第2期 57-68
- 龔蔭 (1992) 《中国土司制度》雲南民族出版社
- 格桑居冕 [sKal-bzang 'Gyur-med]・格桑央京 [sKal-bzang dByangs-can] (2002) 《藏語方言概論》民族出版社
- 任乃強・任新建 (2002) 《四川州縣建置沿革圖說》巴蜀書社
- 四川大学方言調查工作組 (1960) 〈四川方言音系〉《四川大学學報 社會科學》第5期 1-123+18 地図
- 蘇發祥主編 (2006) 《西藏民族關係研究》中央民族大學出版社
- 孫宏開等 (2007) 《白馬語研究》民族出版社
- 烏雲高娃 (2004) 〈清四譯館“西洋館”〉《文化雜誌》中文版第53期 131-140
- 楊嘉銘等 (1994) 《甘孜藏族自治州民族誌》當代中国出版社
- 楊時逢 (1984) 《四川方言調查報告》中央研究院歷史語言研究所

[付記]

北京・故宮博物院図書館における文献調査を許可していただいた同館に感謝する。また、この調査については、中国社会科学院研究員・烏雲高娃氏の援助によって実現した。合わせて同氏にもここに記して謝意を表する。筆者によるチベット語方言資料収集に関する現地調査については、平成16-20年度文部科学省科学研究費補助金基盤研究(S)「チベット文化圏における言語基層の解明」(研究代表者：長野泰彦、課題番号16102001)および平成19-20年度日本学術振興会科学研究費補助金(特別研究員奨励費)「川西民族走廊・チベット文化圏における少数民族言語の方言調査と地域言語学的研究」の援助を受けている。

**Caractéristiques dialectales du tibétain de Dartsendo
au XVIII^e siècle dans *Xifan Yiyu* n° 7**

Hiroyuki SUZUKI

résumé

On sait que le document tibétain-chinois, *Xifan Yiyu* n° 7 (XY7), édité au XVIII^e siècle durant la dynastie de Qing, transcrit un dialecte appartenant au groupe dialectal Khams. Cependant, les caractéristiques linguistiques de ce dialecte ne sont pas connues en détail à cause de l'insuffisance des matériaux sur les dialectes tibétains modernes utiles à l'analyse des caractéristiques de la langue du XY7.

Cet article traite de la reconstruction du système phonémique tibétain transcrit dans le XY7 en utilisant des données du chinois du Sichuan et de dialectes tibétains, en plus une analyse des caractéristiques de cette langue en comparaison avec les dialectes khams modernes. En conclusion, on montrera que le dialecte transcrit dans le XY7 appartient au sous-groupe Minyag dans le groupe dialectal Khams.

(受領日 2009年3月31日)
(受理日 2009年9月1日)